

世界を舞台に労働運動をリードする女性たち

ILO（国際労働機関）の理事であり、インダストリアル日本加盟組織協議会の事務局長を長く務められた郷野晶子さんが、2022年11月の国際労働組合総連合（ITUC）世界大会で日本から初の会長に選出されました。郷野さんからは多大なご指導、ご協力をいただきました。

常に国際労働運動の最前線で活躍されてきた郷野さんに平川事務局長がインタビュー。国際労働運動のリアルとそこで活躍する女性リーダーたちについて、熱く語っていただきました。

「女性は働かなくていい」と言われた時代に英語力を磨いて労働組合の世界へ

【平川秀行事務局長次長（以下、JCM）】
本日はありがとうございます。このインタビューでは、郷野さんの思いやお考えを、ざつくばらんにお話しただいて、読者の皆さんに国際労働運動や郷野さんご自身について、身近に感じてもらえればと思っています。

まずは郷野さんの「これまでの歩み」をお聞かせください。
【郷野晶子ITUC会長（以下、郷野会長）】元々、一生仕事がしたいので、手に職をつけたいと思っていまし

た。結婚しても自由に仕事ができるのは通訳だと思ったんです。大学卒業後、企業に就職しましたが、当時は女性も働くなという時代。お茶のいれ方が一番大事という世界。男性と同等の仕事ではなかった。男性は研修で工場勤務、私たちは電話の応対から教わる、そういう時代です。4年くらいで結婚して辞めていくのが当たり前で、会社も期待しない。そこで、自分で能力・技術つけようと思

い、仕事の後に勉強に行きました。英会話学校で本格的に勉強し、通訳学校にも行って、その紹介で、当時のゼンセン同盟に入りました。その時は労働組合のことはまったくわかりませんでした。ただ英語の仕事

ができるということ。【JCM】民間企業からゼンセン同盟（現、UAゼンセン 以下ゼンセンと記述）に入られたそうですが、カルチャーショックのようなものはありましたか？

【郷野会長】ありましたね。男女の差は企業ほどはなかったですが、やはり当時、組合は男の社会で、女性はお茶くみと補助が普通でした。また、仕事は割と激しくて、当時はまだストライキもありましたし。あくまでも役員は全部男性、女性は女性局長しかいなかった。その時の組合の活動は、結構肉体的にも大変だった。徹夜交渉も当然普通、体張ってオルグするするという、男じゃなきゃ務まらない

【郷野会長】ゼンセン同盟はTWAROという組織を実質的に運営するなど、国際関係が活発で、やらせてもらえる仕事は多かったです。活躍している女性の先輩もいました。また、TWAROには外国人の副書記長が



郷野晶子ITUC会長（左）と平川秀行金属労協事務局長次長

【JCM】そういうところでも、国際分野というか英語を使う仕事があったという気持ちがあって、続けられた？

政情不安な国で危険と向い合せすべては仲間のために

【郷野会長】ゼンセン同盟はTWAROという組織を実質的に運営するなど、国際関係が活発で、やらせてもらえる仕事は多かったです。活躍している女性の先輩もいました。また、TWAROには外国人の副書記長が

※1 国際繊維被服皮革労組同盟アジア太平洋地域組織



常駐していて、毎年アジアから人を呼んでゼンセンで日本の労使関係などについて教育を行っていました。外国の方々を知り、英語の勉強にもなりました。それがとても良い経験になっていると思います。

【JCM】今につながるようなネットワークというの、その当時から培ってきている。

【郷野】ゼンセンにはアジアの組合と共にやるという気持ちがDNAとしてずっとあります。身体的にも精

神的にも大変ですが、面白かったですよ。戒厳令の時に夜中にバングラデシユに着いて、ひとりポツンと迎えを待つとか。ネパールでクーデターに遭遇したり、テロが頻発するパキスタンに行ったりとか。大変でしたが面白かったですね。

【JCM】ゼンセンは、女性活動が活発で、立派なリーダーの先輩がいらっしやっと思えますが、ご紹介いただけますか。

【郷野会長】私は直接担当ではなかったですが、多田とよ子さんとか、その前には参議院議員になられた赤松常子さんがいらした。ゼンセンは織維だから女性が多いので、女性のための闘いを、ずっと中心にやっていた。一番大きいのは1954年の近江絹糸争議で、女子労働者が頑張った人権闘争です。女性が結婚とか宗教とか、ほとんど自由がなくて働かされていた劣悪な環境の中で頑張った。女性の労働条件を良くするというのが、ゼンセンの中の一つの柱として常にあります。

各国で労働運動をリードする女性たち

【JCM】国際組織に行かれて、国際労働運動で活躍される中で尊敬できるとか、一緒に闘って思い出深い女

性リーダーはいらっしやいますか？

【郷野会長】バングラデシユのSSGF会長のナズマ・アクターさんが印象深い。何十年も知っている方ですが、最初はバングラデシユの縫製関係の児童労働から始めた人。だから当初はあまり英語はできなかったのですが、今はもう英語ペラペラで、組織化もがんばっている。バングラデシユでは、労働協約が法律をなぞっているだけというのが殆どですが、彼女の組合の労働協約は法律を上回っているという国際的に認められています。

今インダストリアルで頑張っている、ミャンマーのカインザーさん。彼女と出会ったのは、ミャンマーの組合がまだ非合法だった時で、彼女はメソッド^{※2}に働きに行っていて、そこで組合活動をやっていました。その時にTWAROとしても支援する

際に知り合いました。2021年にクーデターが起きた頃に、たまたまドイツに留学していたので、国に帰れなくなつて、今、海外から組合支援活動をやっている。彼女も強いですね。まず働きに行つて組合をつくって、非合法の時に頑張つて、民主化された時に組合を一生懸命育てて、活動をやって、今は亡命先で頑張っている。ああいう強い人がいる、そう

いう人と知り合えたということは財産だと思っています。

【JCM】そういう人たちが労働組合のリーダーとして育っていくというのは、TWAROの支援があつたらこそでしょうね。

【郷野会長】TWAROとして教育などの支援をしていました。やっぱりいい人たちがいる組合を育てたいところがあります。女性も含めて、なるべく日本にも呼んで教育と、人間関係を作る機会を持つて育てていくというのはありました。その人たちを大事にして、その国の産別のキーパーソンになつてもらおうという意図でした。

また、ドイツ労働総同盟(DGB)のヤスミン会長、オーストラリア労働組合評議会(ACCTU)のミッシェル・オニール会長なども立派なリーダーです。オニール会長は、学生の時からアルバイトをしていて、その時にセクハラにあつて、困っている時に助けてくれたのが組合という経験の持ち主。そこから組合活動をずっとし始めた。

国際運動では女性で頑張っている人が結構多い。ITUCでは、アメリカ、日本、ドイツのナショナルセンターの会長が女性です。すごいなと思います。時代が変わつた。この方た

※2 ミャンマー国境にあるタイの町。ミャンマーからの労働者が多い。

ちは、クオータ制で女性だから会長になったのではなく、実力でなったのです。今すごくそのような女性は増えていると思います。

女性が増えると

活動のやり方も変わる

だれでも参加しやすい運営に

【JCM】国際労働運動の雰囲気も、始めた頃とは違いますか？

【郷野会長】全然違います。ICFTU(国際自由労連、現ITUC)とかILOの昔の写真を見ると男性がほとんどですよ。今はどこでも女性が多くいて、全然風景は違ってきます。個人的には、最初はクオータ制とか女性割り当てなどが大嫌いだ。私自身も、別に女性だからこの立場になったのではないという気持ちはあったので。

でもやはり結果としてみると、割り当てがあったから女性に実力がつくのが明らかに早まった。各国の組合で女性会長が自然に出てきているのを見ると、やはり必要なのだろうと思います。今はどこでも女性参画率40%が当たり前で、50%を目指せとなっております。やはりそれは大事ですよ。

女性は、なかなか機会がもらえない可能性もあるし、一人が上がつてく

れると、だんだんネットワークができてくる。働き方も多分変わると思えます。スウェーデンで聞いた話ですが、女性の交渉担当になることよ

って徹夜の交渉が少なくなったそうです。日本の組合の活動も、男性の今までの働き方のままで、会合は夜10時まで当たり前となると、家庭責任がある人はできないですよ。女性が入りにくい。だから女性が増えることによって、家庭責任を持つ人が無理なく両立できるように、少しずつ環境が変わってくるのではないかと。女性が増えることによって、男性もやりやすくなった。良い部分があるものすごく出てきている。

【JCM】女性が働きやすい職場は男性も働きやすい。

【郷野会長】そうそう！それがひいては生産性向上になるし、社会が良くなる。昔は男性の働き方に女性に合わせてなさいという感じでしたよね。そうではなく、条件や働き方を変えて、間口とすそ野を広げるといって、良い働き方になっていますよ。女性が増えることによって考え方が変わっていく。

【JCM】それでも日本ではまだまだ社会的に女性の進出が進んでいないし、組合の中でも女性役員のなり手がいないという課題もあります。そ

の点についてどう考えれば良いのかお聞かせくださいませんか。

【郷野会長】組合活動のあり方ですね、まず活動の時間だと思います。家庭を持っていたら結構きつい。それと組合の活動自体に女性目線があまりないから、女性があえて自分を犠牲にしてもやりたいと思えるかという問題もある。やはり、女性が活動に入りやすい体系を作らないと厳しいかなと思います。女性は活動参加の機会が少ないので、少し無理してでも機会を与えて成長させようという努力をさらになさなければいけないと思います。また女性登用するときは、複数登用してほしいと私はいつも思っています。同じような立場の人を最低二人。一人だと孤独じゃないですか。だからやはりネットワークができるような形に、常にもらわれないといけない。あと単組から人が増えないと、いくら産別で頑張ってもなかなか厳しいと思う。そこは単組レベルの努力もしてもらいたいと思いますけどね。

変わるべきは男性の意識と働き方

【JCM】女性を役職に引き上げたか

らにはバックアップも必要ですね。【郷野会長】やはり、メンターが必要ですよ。オーストラリアでは、組合



でメンター制度をやっているようです。特に女性はいろいろな機会をもらっても、慣れていないから、メンターは常に必要だと私は思います。あとはネットワーク。強力なネットワーク。昔からアメリカの労働運動でも、どこでも、オールドボーイズのネットワークがあるから女性がなかなか入れない。逆に言うと、ガールズネットワークがすごく必要です。

あと、男性の考え方を変えてもらわないと。まだ古い人が大勢いらっしゃるのだから(笑)。だって女性が組合活動頑張つてやろうとすると、結局、実際には夜家庭にいないことも多くなるわけでしょう。それでパートナー



郷野晶子 (ごうの・あきこ)
1981年にゼンセン同盟へ入局。2012年にはインダストリアル執行委員代理、およびインダストリアルアジア太平洋地域女性委員長を務める。2016年にインダストリアル日本加盟組織協議会事務局長へ就任し、同年より連合参与を務める。2017年よりILO (国際労働機関) 理事。2022年11月ITUC会長に就任。

から、「俺のメシは？」とか、「子どもどうすんだ」って言われたら、できるわけないですよ。そういう意味では、職種を問わず、男性も自立しない。やはり男女共同参画って男性の問題でもあるんです。本人はやりたくても、やっぱり家庭のことを考えると二の足を踏む。そのところで家庭として大丈夫って言ってもらえるようにしていかないと。

【JCM】欧州などでは、子育ての支援が手厚かったりして男女が当たり前に働けるような社会になっていると聞きます。

【郷野会長】社会制度もあるかもしれないんですが、もう一つ思うのは働き方が違う。欧州の方が女性も無理なく仕事をしやすくなっているんですよ。要は労働時間が短い、長期休暇を取ることが当たり前です。だから日本人の働き方も変えないといけない。日本人はどっちかっていうと、働くために生きているみたいなのがあるけれど、彼らは楽しむために、休むために生きている。そういう社会だから、休むことに対して、権利として産休を取ったり育休を取ったりすることにに対しては抵抗がないのだと私は思います。だけど日本だと、権利というより、

「育休取らせていただいてすみません」という意識。この意識が変わらないといけない。

例えば子育て中には子どもが熱出すとか、いろいろあります。そこを「お互い様」っていう風に思える社会に

やないと女性が思っきり働くのがキツイかなあと思います。ちゃんと休みをとって、人間としての生活を大事にした上での仕事と考え方を考える必要があります。日本人は少し発想を変えないと。

【JCM】例えば労働時間も日本では週40時間だけど、欧州は38時間とか35時間ですね。

【郷野会長】その働き方の考え方が全然違うんですよ。減私奉公とか、まだ思っている人がいたら困りますね。それが今、若い人はだいぶ変わってきたから良くなったと思うのですが、やはりそこは考えを変えないと共生の社会っていうにはならない。いろいろな人に優しい社会。

【JCM】そうですね。男女だけじゃなくて障害を持った人に対しても。

【郷野会長】マックス働いて、頑張つて、それに追いつける人だけがちゃんと生きていけるっていう社会ではないじゃないでしょうか。みんなが権利を持って、ちゃんと楽しく余裕をもって働いて、その中には男女に限らず様々な方が他にもいて、ということのかなと思います。

【JCM】最後に日本、特にJCMの女性リーダーたちへのメッセージをお願いします。

【郷野会長】JCMにはすごい女性リーダーが多くいると思っっているんですよ。連合には芳野会長はじめ、女性の総合局長も富田さんと富高さんと2人いるでしょう？やはりお世辞ではなく本当に凄いなと思っっています。考えてみると、JCMが女性の活動を長くやってきたことが成果になつて表れているのではないのでしょうか。これをそのまま頑張っていた方がいいと思います。

JCMの女性のセミナーなどで、産別のトップや書記長を呼んでますよね。あれもすごくいいなと思っっています。やはり男性を、しかもトップを巻き込んだ活動をなさっているというのが成果にもつながっているのかなと思います。

ですから今までの活動をぜひ続けていただきたいたいというのと、やはり単組で頑張ってもらいたいと思います。産別で役職に就く人が増えるのも大事ですけど、単組レベルでの取り組みが大事です。期待するのは、モデルになつて、他の組織に広げていただきたいたいということです。経験共有してもらえるとありがたいですね。